

スミチオン分析のための予備実験

福岡県林業試験場 高木潤治

はじめに

松くい虫防除のために、スミチオンの空中散布が行なわれている。空中散布されたスミチオンの散布量と、その残留量（経時変化）とを知るためには、生物検定による間接的方法や、化学分析による直接的方法などが利用されている。

経時変化の原因としては、温度・日射・雨・風などの条件が考えられる。そこで、それらの条件と残留量との関係を定数化できるならば、スミチオンの残留量は、手間のかかる間接、直接の測定を行なわなくても、予測が可能になるはずである。

本実験では、考えられる上の条件のうち、温度と日射との関係を知るために、2・3の予備実験を行なったので、ここに報告する。

実験方法

約 2 cm^2 の沪紙に、2%のスミチオン水溶液を一定量マイクロシリンジを用いて添着させ、一定条件で放置後、一定濃度になるようにアセトン量を変えて抽出を行ない、ガスクロで定量した。例えば、2%スミチオン水溶液を、50 μl 沪紙に添着させ、それを10cc, 20ccのアセトンで抽出すると、それぞれ500ppm, 200ppmの回収がなければならないことになる。

条件としては、回収率試験としてa)～d)の条件で、残留試験としてe), f)の条件で実験を行なった。

- a) アセトンによる抽出時間を10分、20分、30分にとり、各々の回収率を見た。
- b) スミチオンを添着させる沪紙の大さきを 2 cm^2 , 4 cm^2 , 6 cm^2 として各々の回収率を見た。
- c) 0°C 以下で4日、9日間冷蔵したものの回収率を見た。
- d) 40°C の恒温器で、1時間、6時間放置して、その回収率を見た。
- e) 9月10日～10月2日の間、室内に放置したものと、直射日光の当る室外に放置したもの（ただし、雨水のかからないようにしたもの）との、各々の回

収率を見た。

f) 10月14日～10月22日の間、室内に放置したものと、室外に放置したもの（ただし、雨水のかからないようにしたもの）と、その各々の回収率を見た。

結果

- a) 沪紙からのスミチオンの回収は、抽出時間を20分以上とれば、ほぼ97～103%の回収率を得ることが出来る。（表1）
 - b) 沪紙の大きさと回収率との変化も、ほとんどないものと思われる。（表2）
 - c) 0°C 以下で冷蔵すれば、保存は問題ないものと思われる。（表3）
 - d) 40°C の温度で6時間ぐらいの条件では、ほとんど変化は見られない。
 - e) 9月10日～10月2日の実験では、スミチオンが半減するのに、室内では、17～18日間かかり、室外では、4～5日間かかった。（図1）
 - f) 10月14日～10月22日の実験では、室内での変化は、ほとんど見られず、室外でようやく30%程度の減少を見ただけだった。（表1-5, 表1-6）
- 最後に、上の予備実験で得たスミチオン残量の減衰カーブを、気象データと比較して、大まかな推定式を作ってみた。

$$y = A l^{-0.0065x}$$

y ; スミチオン残量

A ; 最初の散布量

x ; 晴れの日の積算温度

実験値 %	100	72	55	29	22	13	6
上式からの推定値 %	100	71	51	30	24	11	9

上の式は、雨量の影響を全く考慮していないのと、少ないデータから、単に当てはめただけであるので、実用にはならないと思うが、将来は、雨量、温度、日射量のデータをそろえて、フィールドの実際に合うような推定式を作ってみたい。

